

# トリエンナーレの時代

——国際芸術祭は何を問いかけているのか



社会研究部 主席研究員・芸術文化プロジェクト室長 吉本 光宏  
mitch@nli-research.co.jp

## 1——日本各地に広がるトリエンナーレ、ビエンナーレ

瀬戸内国際芸術祭 2013、あいちトリエンナーレ 2013、十和田奥入瀬芸術祭、神戸ビエンナーレ 2013、中之条ビエンナーレ 2013。昨年、全国各地で開催されたトリエンナーレ、ビエンナーレ形式の大規模な芸術祭である。今年は、3月下旬から5月上旬に中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスが開催され、夏にはヨコハマトリエンナーレ 2014、札幌国際芸術祭 2014、そして秋には国東半島芸術祭も開催予定だ。トリエンナーレは3年に1回、ビエンナーレは2年に1回開催される国際美術展・芸術祭で、海外ではヴェネチア、ドクメンタ（独カッセル）、ミュンスター彫刻プロジェクト（独、ミュンスター）、リヨン、リバプール、サンパウロ、イスタンブール、光州（韓国）、釜山、広州（中国）、台北、シンガポール、シドニーなどの例が知られている。

しかし、ひとつの国で、これほど多くの大規模かつ多様なトリエンナーレが開催されている国は日本において他にないのではないかと。しかもそのほとんどが2000年以降に創設されたものである。

本稿では、国内外のトリエンナーレの開催状況を整理した上で、日本の主要なトリエンナーレの目的や事業内容、成果などを検証し、トリエンナーレの意味や社会的な役割を考察したい。

### 1 | 国際的なトリエンナーレの開催状況

現在、世界中で開催されているトリエンナーレの数を正確に把握することは容易ではない。比較的信頼性が高いと思われるポータルサイトで調べてみると、Biennial Foundation（以下BF）<sup>2</sup>の掲載件数は144件、Asia Art Archive（以下、AAA）<sup>3</sup>では83件となっている。ただしAAAはア

<sup>1</sup> 本稿ではトリエンナーレ、ビエンナーレなど、定期的で開催される国際美術展・芸術祭を便宜的にトリエンナーレと記載することとした。国内ではトリエンナーレ形式のものが多いが、海外の事例はビエンナーレ形式が主流となっている。

<sup>2</sup> 2009年、ビエンナーレ間の相互交流やネットワークの形成を目的に、オランダ、ドイツ、ギリシャなどの財団の支援によって設立された非営利組織。

<sup>3</sup> 2000年、アジアにおける現代美術史の記録を目的に香港で設立された非営利組織で、資料類のコレクションと公開、パブリックプログラム、リサーチなどを実施。香港ビエンナーレ2005の関連企画として、Art Map Limitedと共同でデータベースを構築、公開している。

一カブ的な視点から情報を収集しているため、現在は開催されていないトリエンナーレも含まれている。83件を個別にインターネットで検索すると、1回だけで終わったり近年の開催が確認できなかったりしたものが23件あり、それを除くと60件であった。

参考までにBFに掲載されたトリエンナーレの国別件数は図表1のとおりで、日本は米国、英国、中国に次いで開催件数の多い国となっている。ただしBFに掲載されていないものも含めた日本の件数は18件で（図表2参照）、世界で最もトリエンナーレの盛んな国の一つであることは間違いない。

国や地域の代表的なもの、歴史の長いものなど、海外の主要なトリエンナーレ約20件をピックアップし、国内のものとあわせて開催地、最近の開始年と今後の開催予定を図表2に整理した。

最も歴史が古いのは1895年に始まったヴェネチア・ビエンナーレで120年近い歴史を有している。その後、サンパウロ・ビエンナーレ、ドクメンタなどが1950年前後に始まっているが、世界各国のトリエンナーレも90年以降に創設されたものが多い。AAAのリストでも83件の内65件が90年以降に始まったもので、主催団体は行政組織が65%、民間が35%とされている<sup>4</sup>。

## 2 | 日本のトリエンナーレの開催状況

日本でも1952年から日本国際美術展（東京ビエンナーレ）が2年ごとに開催されていた。これはアジアで初めてのビエンナーレ形式の国際展だったが、90年を最後に終了した。15回の開催のうち、70年の第10回展は日本の美術史に大きな足跡を残すものだった。美術評論家の仲原佑介をコミッショナーに迎え「物質と人間」をテーマに70年代の国内外の重要な美術動向を包括した国際展で、展覧会の入場者に「これがなぜ芸術か」という衝撃を与えたとされる<sup>5</sup>。ヴェネチア・ビエンナーレをはじめ、トリエンナーレの多くは各国を代表するアーティストの展示を行う形式が主流だったが、この10回展は国籍別展示を廃した点でも斬新なものだった。

最近の国内のトリエンナーレを語る上ではもうひとつ、1988年から98年まで山梨県白州町で毎年開催された白州・夏・フェスティバル（白州アートキャンプ）にも触れておかなければならないだろう。白州町に「身体気象農場」を開き、農業を営みながら舞踏に取り組む田中泯の活動をベースに、芸能や踊り、音楽、演劇など多様なプログラムが実施された。フェスティバルの一環として農山村に美術作品も多数設置された。

国際的にも注目を集める大地の芸術祭（越後妻有アートトリエンナーレ）、瀬戸内国際芸術祭など、里山や離島で展開されるトリエンナーレが日本の大きな特徴となっているが、白州・夏・フェスティバルはその原型だったとも考えられる<sup>6</sup>。

図表1 国別トリエンナーレの開催件数

米国	13
英国	10
中国	8
日本	7
ドイツ	6
韓国、フランス	5
イタリア、トルコ	4
オーストラリア、ブラジル、カナダ、ノルウェー、ルーマニア、ロシア、台湾	3

資料) Biennial FoundationのHP掲載情報に基づいて作成  
3件以上開催されている国をピックアップした。

<sup>4</sup> <http://www.aaa.org.hk/onlineprojects/bitri/en/index.aspx>

<sup>5</sup> 出品作家は、カール・アンドレ、ダニエル・ビュレンス、クリスト、ルチアーノ・ファブロ、ハンス・ハーケ、川口龍夫、河原温、ソル・ルウィット、ブルース・ナウマン、ジョゼッペ・ペノーネ、リチャード・セラ、高松次郎など、後の現代美術界をリードする錚々たる顔ぶれだった。（現代企画室+BankART出版、中原佑介美術批評 選集 第五巻、2011年8月）

<sup>6</sup> 他にも、離島では佐久島アートプランが2000年から、里山ではアートプログラム青梅が2003年から、それぞれ毎年開催されている。

図表2 国内外の主なビエンナーレ、トリエンナーレの開催状況

名称	開催地	第1回開催年	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
東京ビエンナーレ(日本国際美術展)	東京都	1952		●																														
白州・夏・フェスティバル 白州アートキャンプ	山梨県	1988											●																					
福岡アジア美術ビエンナーレ*	福岡市	1999																																
大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ*	新潟県十日町市、津南町	2000												1																				
ヨコハマトリエンナーレ*	横浜市	2001													1																			
BIWAKOビエンナーレ	滋賀県近江市	2002														1																		
岐阜おおがきビエンナーレ	岐阜県大垣市	2004															1																	
中之条ビエンナーレ	群馬県中之条町	2007																1																
神戸ビエンナーレ*	神戸市	2007																	1															
北九州国際ビエンナーレ	北九州市	2007																		1														
開港都市にいがた 水と土の芸術祭	新潟市	2009																			1													
別府現代芸術フェスティバル 混浴温泉世界	大分県別府市	2009																				1												
あいちトリエンナーレ*	名古屋市、岡崎市	2010																					1											
瀬戸内国際芸術祭*	香川県直島、小豆島、高松市等	2010																						1										
西宮船坂ビエンナーレ	兵庫県西宮市	2011																						1										
十和田奥入瀬芸術祭	青森県十和田市	2013																								1								
国東半島芸術祭	大分県豊後高田市、国東市	2013																										1						
札幌国際芸術祭*	札幌市	2014																											1					
中房総国際芸術祭 いちはらアート×ミックス	中房総エリア	2014																												1				
京都国際現代芸術祭	京都市	2015																													1			
ヴェネチア・ビエンナーレ	イタリア・ヴェネチア	1895	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カーネギー・インターナショナル	米国・ピッツバーグ	1896	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
サンパウロ・ビエンナーレ	ブラジル・サンパウロ	1951																																
ドクメンタ	ドイツ・カッセル	1955																																
シドニー・ビエンナーレ	オーストラリア・シドニー	1973																																
ミュンスター彫刻プロジェクト	ドイツ・ミュンスター	1977																																
バングラデシュ・アジア・アートビエンナーレ	バングラデシュ・ダッカ	1981																																
ハバナ・ビエンナーレ	キューバ・ハバナ	1984																																
イスタンブール・ビエンナーレ	トルコ・イスタンブール	1987																																
リヨン・ビエンナーレ	フランス・リヨン	1991																																
ダカール アフリカ現代美術ビエンナーレ	セネガル・ダカール	1992																																
シャルジャ・ビエンナーレ	アラブ首長国連邦・シャルジャ	1993																																
光州トリエンナーレ	韓国・光州	1995																																
上海ビエンナーレ	中国・上海	1996																																
台北ビエンナーレ	台湾・台北	1998																																
モントリオール・ビエンナーレ	カナダ・モントリオール	1998																																
リバプール・ビエンナーレ	英国・リバプール	1999																																
釜山ビエンナーレ	韓国・釜山	2002																																
広州トリエンナーレ	中国・広州	2002																																
マラケシュ・ビエンナーレ	モロッコ・マラケシュ	2005																																
シンガポール・ビエンナーレ	シンガポール	2006																																

資料) 海外事例については Asia Art Archive、Biennale Foundation および各トリエンナーレの HP 掲載情報に基づいて、国内事例については各トリエンナーレの HP 掲載情報及び主催機関の提供資料に基づいて作成。

注) \*印は BF に掲載された図表 1 の一覧表に含まれている国内のトリエンナーレ。各年の数字は開催回数で、実施分は白抜きで、今後の実施予定については、定期的に開催された場合を想定して記入した。

## 2—日本の主要なトリエンナーレの概況

現在日本で開催中あるいは今後開催予定のトリエンナーレは図表 2 に示したとおりである。トリエンナーレ・ブームとでも呼べる現在の状況を生み出したのは、やはり 2000 年に始まった大地の芸術祭と翌年にスタートしたヨコハマトリエンナーレの二つであろう。

日本のトリエンナーレは、農山村や離島で開催される「里山型」と「大都市型」に大きく分けられるが、その二つのトレンドはそれぞれこの二つのトリエンナーレが起点となっている。前者には十和田奥入瀬芸術祭、中之条ビエンナーレ、西宮船坂ビエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、国東半島芸術祭などが、後者には札幌国際芸術祭、あいちトリエンナーレ、北九州国際ビエンナーレなどが含まれる。

新潟市で開催された水と土の芸術祭は、大都市型でありながら水と土をテーマに広域展開することで里山型の要素を兼ね備えたものになっており、別府現代芸術フェスティバル混浴温泉世界や中

房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスは、どちらかに分類することは難しいが、地域の特性や文脈に基づいた展開が特徴となっている。

これらのうち、2013年に開催された主要な3件について、概要を図表3整理した。このうち、筆者が実際に訪問した瀬戸内とあいちについて、少し詳しく見てみたい。

## 1 | 瀬戸内国際芸術祭 2013——美しい自然と作品の背後に潜む日本近代化の負の歴史

この芸術祭は1992年にベネッセグループが直島でスタートさせた一連のアートプロジェクトの延長線上に位置している。2010年、直島に豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺を加え、「海の復権」をテーマに最初の瀬戸内国際芸術祭が開催され、真夏の105日間に老若男女93万人が来場し、大きな話題となった。

2013年は、沙弥島、本島、高見島、粟島、息吹島の中西讃5島を加えた瀬戸内12島と高松港・宇野港周辺を会場に、春、夏、秋の3会期に分けて実施。26の国と地域から参加した200組のアーティストの作品207点（2010年は76点）が、瀬戸内の島々に設置された。

高松から最西端の息吹島の作品を回るだけで一日がかり、芸術祭の全貌を把握するのは容易ではない。それでも108日間に前回は上回る107万人が来場、今回も会期中、島に渡る船ほどの便も芸術祭に訪れる人々で一杯になった。香川・岡山県外からの来場が5割を超え、2.6%は外国からの来場者であった。

この芸術祭の特徴は、世界的にも質の高いアート作品を巡りながら、瀬戸内の美しい島々の自然、そこで培われてきた島固有の歴史や文化、生活に触れ、体験できることである。お年寄りをはじめとした島々の住民との触れあいも大きな魅力だ。

「私たちは、美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の『希望の海』となることを目指し、瀬戸内国際芸術祭を開催します」と主催者が宣言するように、この芸術祭は地域の活性化が大きな目的となっている。総合プロデューサーの福武總一郎（公益財団法人福武財団理事長）は「建築やアート作品、アーティストやボランティア、来訪者さえも、地域のお年寄りの笑顔をつくるための道具立て」だと語る<sup>7</sup>。

実際、2013年の芸術祭では次のような効果があったことが報告されている<sup>8</sup>。

- 男木島では、芸術祭を契機に帰郷を希望する世帯があり、休校中の男木小中学校が今年4月から再開することとなった
- 大島では「大島の在り方を考える会」が設置され、大島青松園（国立ハンセン病療養所）の歴史を後生に伝え、島の景観を活かした今後の在り方の検討が始まった
- 豊島では、豊島美術館の整備を契機に、島の原風景である棚田の景観維持の活動が長期スパンで展開される予定である
- 香川県内の経済波及効果は132億円。宿泊事業者の75%、飲食事業者及び商店街関係者の80%が芸術祭の開催効果があったとアンケート調査に回答している

<sup>7</sup> 日経BP社 「日経アーキテクチュア」 4/25号 No.998

<sup>8</sup> 瀬戸内国際芸術祭実行委員会、瀬戸内国際芸術祭 2013 総括報告（2013年12月9日）から主なものをピックアップ、整理した。

図表3 2013年に開催された主なトリエンナーレの概要

瀬戸内国際芸術祭 2013	
テーマ	海の復権（アートと島を巡る瀬戸内の四季）
会期   開催日数	春：3月20日～4月21日、夏：7月20日～9月1日、秋：10月5日～11月4日   計108日間
開催地・会場	瀬戸内海の12の島（直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島、本島、高見島、粟島、息吹島）及び高松港・宇野港周辺
アーティスト・作品数	参加アーティスト：26の国と地域から200組、アート作品数：207点、イベント：105件
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>2010年の第1回の開催地に香川県西部の5島を追加して実施。一時期に大量の来場者が訪れて受入に課題があった前回の反省もあり、今回は、春、夏、秋の3回に分けて実施された。</li> <li>瀬戸内の島々を船で巡りながら、そこかしこに設置されたアート作品とそれぞれの島や地域に継承されている固有の文化や歴史、人々の暮らし、島々の美しい自然や景観を体験する。島に残された日本の近代化の負の遺産に向き合うことで、歴史や未来を再考するきっかけともなっている。</li> </ul>
主催・運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>主催：瀬戸内国際芸術祭実行委員会（構成団体：香川県、高松市、丸亀市、観音寺市、三豊市、土庄町、直島町、多度津町、玉野市、(公財)福武財団等47団体）</li> <li>総合プロデューサー：福武総一郎、総合ディレクター：北川フラム</li> <li>ボランティアサポーター：こえび隊（実働人員約1,300人、延べ約7,000人）</li> </ul>
来場者数	107万368人（春26.3万人、夏43.5万人、秋37.2万人）（香川・岡山47.1%、他国内50.3%、外国2.6%）
総事業費 （2011～13年度3ヶ年）	11億7,500万円（収入見込み、主な財源は香川県2億円、関係市町2.3億円、福武財団1.9億円、補助金・助成金0.9億円、寄付金・協賛金1.6億円、チケット販売収入2.4億円など）
あいちトリエンナーレ 2013	
テーマ	揺れる大地—われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活
会期   開催日数	8月10日～10月27日   79日間
開催地・会場	名古屋地区（愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、長者町会場、納屋橋会場、中央広小路ビル、オアシス21、名古屋テレビ塔、若宮大通公園など）、岡崎地区（東岡崎駅会場、康生会場、松本町会場）
アーティスト・作品数	参加アーティスト：34の国と地域から122組
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災を含め、世界各地の社会の変動を意識しつつ、建築的な視点を取り入れながら、国内外の先進的な現代美術の展示、パフォーマンス、オペラ公演を実施。</li> <li>愛知芸術文化センター、名古屋市美術館に加え、名古屋市内では繊維問屋街の長者町の空きビルや納屋橋のテナントビル、岡崎市内のショッピングセンターを活用してまちなか展開を図った。</li> </ul>
組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>主催：あいちトリエンナーレ実行委員会（構成団体：愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所、(社)中部経済連合会、中日新聞社、NHK名古屋放送局、国際交流基金等）</li> <li>芸術監督：五十嵐太郎</li> <li>ボランティア：実登録者数1,310名、実活動者数964名</li> </ul>
来場者数	62万6,842人（名古屋市内29.5%、名古屋市以外の愛知県内34.3%、県外34.8%、海外1.3%）
総事業費 （2011～13年度3ヶ年）	約12.6億円（主な財源は、愛知県7.1億円、名古屋市2.3億円、事業収入2.8億円、広告・協賛金等収入0.4億円）（収入額、2011～12は決算額、13年度は予算額）
十和田奥入瀬芸術祭	
テーマ	SURVIVE ～この惑星（ほし）の時間旅行へ
会期   開催日数	9月21日～11月24日   65日間
開催地・会場	十和田市現代美術館、奥入瀬・十和田湖エリア（旧笠石家住宅（国指定重要文化財）、水産保養所（旧湯治の宿おいらせ）、溪流の駅おいらせ、星野リゾート 奥入瀬溪流ホテル、奥入瀬溪流館、十和田湖遊覧船ほか）
アーティスト・作品数	参加アーティスト：21組、イベント数：30件
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>十和田市現代美術館と豊かな自然を有する奥入瀬・十和田湖を舞台に「時」をテーマに、展覧会、ものがたり集の発行、ゼミナールの開催の3つを柱に開催。</li> <li>美術館では5人の作家が芸術祭のテーマに沿った作品を展示。奥入瀬・十和田エリアでは営業休止中の保養所、重要文化財、リゾートホテル、観光施設、遊覧船などでサイトスペシフィックな作品を展開した。時期は未定だが、継続に向けて協議中。</li> </ul>
組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>主催：十和田奥入瀬芸術祭2013実行委員会（十和田市現代美術館、(財)十和田ふるさと活性化公社、(財)自然公園財団十和田支部、(社)十和田湖国立公園協会、(社)十和田市観光協会、奥入瀬温泉活性化協議会、十和田市）</li> <li>アーティストック・ディレクター：藤浩志</li> <li>ボランティア：50名</li> </ul>
来場者数	7万1,700人
総事業費（奥入瀬・十和田エリアのみ）	3,200万円（十和田市：2,500万円、残りはチケット収入、指定管理者事業費、助成等）

資料）HP掲載情報、主催団体提供資料などに基づいて作成。



豊島甲生地区の竹林に数千本の竹を使って設置されたマイク+ダグ・スターンの『Big Bambú』。竹製の船の舳先からは瀬戸内の美しい島々が一望できる。

しかし、この芸術祭の効果として筆者が注目したいのは、来場者一人ひとりが、この芸術祭を通じて感じ、考えたことである。芸術祭を訪れた人がまず目にするのは、瀬戸内海に浮かぶ島々の美しさであり、棚田や里山に広がる集落などの懐かしい風景である。それは都市部に暮らす多くの日本人が忘れてしまった日本の原風景、「正しい日本の姿」とでも形容するとイメージは伝わるだろうか。実は、これらの島々の美しい風景、素晴らしい芸術作品の背後には日本の近代化の負の歴史が潜んでいる。

犬島、直島では前世紀初頭、相次いで銅の製錬所が開業し、島外からの転入が相次いで島は文化会館や演芸場ができるほど賑わった。しかし犬島では、大正時代のインフレによる銅価格の急落で精錬所はわずか10年で閉鎖<sup>9</sup>。1910年頃に5、6千人だった犬島の人口は、今ではわずか54人、しかもほとんどが高齢者となっている。直島では高度成長期に工場の近代化も進められたが、80年代以降の合理化によって毎年100人というペースで転出が続き人口は急減、島は活力を失っていた。製錬所の亜硫酸ガスで農作物や樹木は大きな被害を受け、今もその傷跡が残る。

一方、石灯籠の石材で有名な豊島は、高度成長期、建設ブームで生産が追いつかないほど栄えたが、その後、韓国・中国の安価な石材の流入で石材業は急速に衰退し、島は活気を失う。1990年には大量の産業廃棄物の不法投棄が発覚、瀬戸内で最も豊かと言われた島は大きなダメージを受けた。そして大島には国立ハンセン病療養所が開設され、根拠のない理由で何人もの人が隔離されていた。

日本の高度成長や大都市の繁栄の陰で、島々は傷つけられてきたのである。芸術祭で設置されたアート作品は、そうした場所に私たちを向かわせる。インターネットで世界中の情報が瞬時に流通する時代にあって、限られた船便を乗り継ぎ、炎天下の中、自分の足だけを頼りに島のそこかしこに設置された作品を探し出す。都会の便利な生活に慣れ親しんだ者にとっては、苦行と言えなくもない。

しかし、身体感覚のすべてを使って感じ取る島々の自然や人々の営み、歴史や文化、そしてアート作品との出会い。その体験は、私たちに様々なことを問いかけてくる。日本の美しい風土や文化に改めて気づかされるだけでなく、高齢化や過疎、環境問題、都市と地方の乖離など、現代社会の抱える矛盾が容赦なく突きつけられる。

<sup>9</sup> 銅製錬所の遺構を活用し、現在は犬島精錬所美術館が開設されている。



会場のひとつとなった納屋橋の倉庫ビル（左）。岡崎シビコの屋上に設置された studio velocity の『roof』（右）。

アート作品は、私たちがそうした思索と思考に導く道先案内であり、瀬戸内という母なる海に抱かれた島々は、本当の豊かさとは何か、日本はこれからどこへ向かうのか、といったことを考える格好の舞台を提供してくれる。

## 2 | あいちトリエンナーレ 2013——災後の日本、不確かな世界のあり方を考える

一方あいちトリエンナーレは、「揺れる大地—われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活（Awakening – Where Are We Standing? – Earth, Memory, and Resurrection）」というテーマが示すとおり、東日本大震災や原発事故が強く意識されている。しかしそれはテーマの一部に過ぎない。芸術監督の五十嵐太郎は「我々が立つ場所やアイデンティティが揺らいでいる危機的な状況」という広い意味で「揺れる大地」というテーマを掲げた。英語タイトルの *Awakening* には「今までに気がつかなかったものが新しく意識される」という狙いが込められている。

このトリエンナーレでは、国際美術展だけではなく、企画コンペによる展示、映像プログラム、パフォーマンス、プロデュースオペラ、普及・教育、建築関連プロジェクト、そしてモバイル・トリエンナーレ（移動型展示）と多彩なプログラムが実施された。愛知県立美術館、本格的オペラの上演可能な大ホール、小ホール、コンサートホールなどが複合された愛知芸術文化センターがメイン会場となっていることも、その背景のひとつとなっている。

そこに展示された数多くの作品の中でも異彩を放っていたのは、地下2階から地上10階までを使って展示された宮本佳明の『福島第一さかえ原発』という作品だ。1階エントランスには炉心と思われる平面図が黄色いテープで描かれ、8階展示室には壊れた建屋の一部が再現された。センター全体の空間を使って福島第一原発を原寸大で再現し、その大きさを実感してもらおうという試みだ。実際、映像や写真でしか知らない原発の巨大さには圧倒される。

あいちトリエンナーレではまちなか展開も重視している。3年前の第1回では日本三大繊維問屋街の一つである長者町繊維街の空きビル、ボーリング場として建設された納屋橋の倉庫ビルに多数の作品が設置されたが、今回は、それら名古屋市内の2会場に加えて、岡崎市にも広がった。

筆者が印象に残っているのは、岡崎シビコという営業中のショッピングセンターでの展示だ。陳列台の商品を横目で見ながらエスカレータを上ると、テナントの撤退した5階にたどり着く。そこから屋上までの3フロアに作品が展示された。5階では向井山朋子とジャン・カルマンのインスタ

レーションとパフォーマンス『FALLING』が展開される。サミュエル・ベケットの戯曲『いざ最悪の方へ』から着想を得た作品で、うずたかく積み上げられたおびただしい数の新聞紙や壊れたピアノの展示に息をのむ。6階は岡崎市出身の写真家、志賀理江子の『螺旋海岸』。2009年から活動の拠点を宮城県名取市に移し、東日本大震災で甚大な被害を受けた北釜地区を撮り続けた写真群である。屋上は、建築家ユニット栗原健太郎と岩月美穂の studio velocity によって真っ白に塗り替えられ、グリッド状に張り巡らされた無数の糸が空に漂う。『roof』という作品だ。

岡崎シビコはかつて市内有数の商業施設だったところで、全盛期には人で溢れかえったという。今も営業を続けるがその頃の面影はない。そうしたビル固有の歴史と、そこに設置された作品群がトリエンナーレのテーマとつながり、社会の仕組みが大きく揺らいでいることが印象づけられる。あいちトリエンナーレでは、「揺れる大地」というテーマを参加アーティスト一人ひとりが解釈し、他にも社会性の強い作品が数多く展示された。

### 3——社会に問いかける芸術祭

十和田奥入瀬芸術祭でも十和田市現代美術館に加え、奥入瀬・十和田湖エリアが開催地となった。高度成長期以降、日本を代表する観光地として栄えた十和田湖温泉郷。バブル崩壊で経営が悪化し、東日本大震災による客足の減少が追い打ちとなって、廃業や休業に至った宿泊施設が少なくない。

この芸術祭も、そうしたエリア、施設を会場にすることで、私たちに何かを訴えようとしている。筆者が唯一最終日に訪問することのできた水産保養所（旧湯治の宿おいらせ）。半ば廃墟と化した建物全館を使い、梅田哲也、コンタクトゴンゾ、志賀理江子の3組のアーティストによって行われたインスタレーション『知らないうちに船は出ていた』は、まさしくそれを象徴するような存在だった。

数十年間の観光業の盛衰と観光開発の傷跡が凝縮されたような建物、しかしそれが立地する十和田湖、奥入瀬溪谷の自然とその美しさは数千年の時を超えて微動だにしない。経済と自然、その間で揺れ動く人間の存在。かつて多くの観光客で賑わったであろう保養所の中では、そうしたことに思いを馳せない訳にはいかない。

瀬戸内、あいち、十和田奥入瀬。それぞれの地が歩んできた歴史、人々が培ってきた文化、そして芸術祭としてのアプローチは大きく異なっている。しかしこれらのトリエンナーレが、私たちに何かを深く考えさせる国際芸術祭である点は共通している。

#### 1 | 2014年に開催が予定されるトリエンナーレ

今年も全国各地でトリエンナーレの開催が予定されている。福岡アジア美術館の主催で1999年に始まった福岡アジアビエンナーレは、5年ぶりに5回目が開催される予定だ。ヨコハマ、BIWAKO、岐阜おおがきの他、国東半島では2012年にスタートした3年間のアートプロジェクトの最終年として芸術祭が開催され、札幌では新たなトリエンナーレがスタートする。そのうちの3件の概要を図表4に整理した。

2001年の開催から数えて5回目となる横浜トリエンナーレは、アーティストック・ディレクターに日本を代表する現代美術家、森村泰昌を迎えた。展覧会のタイトルは「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」。焚書をテーマにしたレイ・ブラッドベリのSF小説『華氏451度』



図表4 2014年に開催予定の主なトリエンナーレの概要

ヨコハマトリエンナーレ 2014	
テーマ (展覧会タイトル)	華氏 451 の芸術：世界の中心には忘却の海がある
会期   開催日数	8月1日～11月3日   計89日間 (第1・3木曜休場)
開催地・会場	横浜美術館、新港ピア
アーティスト数	約65組 (予定)
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>1997年、外務省が発表した国際美術展の定期開催方針に基づいて2001年にスタートした現代アートの国際展。04年から横浜市の創造都市政策のリーディング・プロジェクトとして実施。</li> <li>国際的な現代美術家、森村泰昌をアーティストィック・ディレクターに迎え、横浜美術館、新港ピアでテーマに沿った国内外のアーティストの作品展示を行うほか、まちにひろがるトリエンナーレとして BankART Studio NYK 等の創造界隈拠点との連携プログラムなどを展開予定。</li> </ul>
主催・運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>主催：横浜市、(公財)横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会</li> <li>アーティストィック・ディレクター：森村泰昌</li> <li>サポーター (ボランティア)：登録者数1,259名 (2014年3月25日現在)</li> </ul>
来場者数 (見込み)	約30万人
総事業費 (見込み) (2012～14年度3ヶ年)	約10億円 (収入見込み、主な財源は横浜市5.7億円、文化庁1.8億円、協賛金・助成金・チケット収入など2.5億円)
札幌国際芸術祭 2014	
テーマ	《テーマ》「都市と自然」《サブテーマ》「自然」「都市」「経済・地域・ライフ」
会期   開催日数	7月19日～9月28日   72日間
開催地・会場	北海道立近代美術館、札幌芸術の森美術館、札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)、北海道庁赤れんが庁舎、モエレ沼公園、札幌市資料館、札幌大通地下ギャラリー500m美術館ほか
アーティスト数	参加アーティストならびに会場構成を行う建築家：48人 (組) (3/13現在)
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>札幌市が推進する「創造都市さっぽろ」の象徴的な事業として開催。都市と自然の共生のあり方を考える国際芸術祭として、世界で活躍する現代アーティストたちが参加し、市内各所で様々なプロジェクトなどを展開。</li> <li>美術館や札幌の街なかを舞台に作品を展開する「エキシビション」、ダンスや音楽などの「パフォーマンス/ライブ」、国際公募企画、ワークショップなどの参加・実践型「プロジェクト」の3部門で構成。</li> </ul>
組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>主催：創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会 (構成団体：札幌市、札幌商工会議所・北洋銀行・北海道銀行・北海道新聞社・札幌観光協会・さっぽろ産業振興財団・札幌市芸術文化財団・市内報道機関各社など道内を代表する企業又は団体計25社)</li> <li>ゲストディレクター：坂本龍一</li> <li>ボランティア：5/15まで登録受付中</li> </ul>
来場者数 (見込み)	約30万人
総事業費 (見込み) (2012～14年度3ヶ年)	約6.6億円 (収入見込み、主な財源は札幌市2.8億円、残りの3.8億円は助成金、協賛金、チケット販売収入など)
国東半島芸術祭	
テーマ	2012年「異人」、2013年「地霊」、2014年のテーマは未定 ※3カ年のアートプロジェクト
会期   開催日数	10月4日～11月30日   50日間(毎水曜休場)
開催地・会場	大分県豊後高田市、国東市 各所
アーティスト数	アーティストは全30組程度 (Web+BOOKプロジェクト含む)
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>国東半島という場所を深く理解するため岬や尾根、集落など特徴的な6のエリアに作品を恒久設置し、それらを巡るトレッキングやロングトレイルなどのツアーを実施する「歩いて旅する」アートプロジェクト。アーティスト・イン・レジデンス、パフォーマンスなどを同時に実施。</li> <li>2012年より国東半島各所で芸術祭のプレ事業としてアートプロジェクトを展開、これまでにオノ・ヨーコ、チェ・ジェンファ、飴屋法水、勅使河原三郎、アントニー・ゴームリー等が参加。</li> <li>次回以降の開催は未定だが、恒久設置作品やツアーの仕組みを今後継続的に活かしていく予定。</li> </ul>
組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>主催：国東半島芸術祭実行委員会 (構成団体：大分県、豊後高田市、国東市、(公社) ツーリズムおおいだ)</li> <li>総合ディレクター：山出淳也、パフォーマンスプログラム・ディレクター：中村茜、レジデンスプログラム・ディレクター：遠藤水城</li> <li>ボランティア：延べ500名程度予定(山岳ガイドを基本とするためペイドボランティアが中心)</li> </ul>
来場者数 (見込み)	2014年開催時：3万人を予定
総事業費 (見込み) (2012～14年度3ヶ年)	約3億2,000万円 (文化庁約1.5億円、大分県0.8億円、豊後高田市0.4億円、国東市0.4億円、助成金・協賛金および販売売上など0.1億円)

資料) HP掲載情報、主催団体提供資料などに基づいて作成。



国東半島芸術祭の会場のひとつ千燈エリアの五辻不動尊。同エリアには 2013 年にアントニー・ゴームリーの作品が設置された。Photo by Naoki Ishikawa

に着想を得たもので、「芸術的冒険の可能性を信じるすべての人々、そして、大胆な世界認識を持ちたいと望むすべての人々と共に『芸術』という名の舟に乗り込み『忘却』という名の大海へと冒険の旅に出ること」を私たちに呼びかける。

同じく大都市を舞台に始まる札幌国際芸術祭は、創造都市さっぽろの象徴的な事業として開催されるもので、ゲストディレクターに坂本龍一を迎え、「都市と自然」をテーマに掲げている。北海道・札幌の都市・観光的課題や過去の歩みをアートとしてふりかえることで、自然、都市のあり方、経済、暮らしを模索し、都市と自然との共生のあり方を問う、という内容だ。

奈良時代から「六郷満山」という山岳仏教が形成され、神と仏が共存する神仏習合文化の発祥の地とされる国東半島には、今も特異な文化や奇祭が受け継がれている。その国東半島の岬や尾根、集落を使って、2012年には「異人」を、13年には「地霊」をテーマにアートプロジェクトが実施されてきた。今年秋に開催される国東半島芸術祭では、2年間に設置された作品を含め、約30組のアーティストの作品が展開される予定である。海岸線や山間部、集落などの特徴的なエリアに恒

久設置された作品を、トレッキングやロングトレイルなどの融合したツアーで巡るというものだ。作品とともに国東半島という土地の持つ力や時間の流れを一人ひとりが体感し、何かを得られる芸術祭となるだろう。

100年以上前に始まったヴェネチア・ビエンナーレは、イタリア統一で地盤沈下したヴェネチア市が、国王の銀婚式を記念して開催を決めた国際美術展で、いわば国家行事として創設されたものである。二度の世界大戦を経て、映画、演劇、音楽、建築、ダンスなどの分野も加えられて現在に至っている。メイン会場のジャルディーニ公園には国別のパビリオンが設けられ、各国のコミッショナーが選出したその国を代表する作家の作品が展示される。長らく美術のオリンピックと言われてきた所以だ。

1980年には若手アーティストを紹介する「アペルト」部門が創設された。1999年には、国立造船所アルセナーレが改装されてビエンナーレの会場となり、巨大な展示スペースでは、国別のパビリオンとは別に大規模な企画展が開催されるようになっていく。

ヴェネチアに限らず、世界各国で開催されるトリエンナーレは、それぞれが独自の目的を持って創設され、時代の変遷に応じてテーマや内容は変化し続けている。地域の特性や社会情勢に応じたテーマが掲げられ、世界各国のアーティストが独自の表現や作品でそれに応え、その積み重ねによって美術や芸術の潮流が形成されてきた。

## 2 | 人口減少と文化の時代に呼応するトリエンナーレ

2000年以降に創設の続く日本のトリエンナーレも、そうした世界の流れの中に位置していることは間違いない。しかし、わずか10年あまりの期間にこれだけ多くのトリエンナーレが全国各地で開催されるようになった状況は、日本という国の大きな変化に呼応していると思えてならない。

日本は人口減少の時代に突入した。長引く少子化と生産年齢人口の減少によって経済や産業の衰退が懸念され、超高齢社会のさらなる進展によって社会保障費の増大が日本の将来に重くのしかかる。確かに人口の減少は国の衰退を連想させる不安な事象ではある。しかし、日本の超長期の人口推移と文化・芸術の関係を俯瞰すると、人口減少は別の視座を私たちに与えてくれる。

図表5 日本の超長期の人口推移と文化・芸術

	人口増加期		人口停滞期	
	年代・人口	文明	期間・社会	文化・芸術
第1波	前4500年～ 30万人	「縄文文明」 狩猟・漁猟・採集	前2500 ～前500年	• 縄文式土器、土偶、靈魂崇拜、呪術文化...etc.
第2波	前500年～ 730万人	「弥生文明」 粗放農耕技術	800～1400年 貴族・武家社会	• 源氏物語、枕草子、平等院鳳凰堂、源氏物語絵巻、鳥獣戯画、新古今和歌集、平家物語、徒然草、能、狂言、金閣、水墨画...etc.
第3波	1400年～ 3,000万人	「江戸文明」 集約農耕技術 初期市場経済システム	1720～1830年 町人・豪商社会	• 歌舞伎、4～7代市川團十郎、仮名手本忠臣蔵、蘭学、解体新書、尾形光琳、浮世絵、葛飾北斎、北川歌麿、川柳、狂歌、洒落本、滑稽本、東海道中膝栗毛、南総里見八犬伝...etc.
第4波	1830年～ 1億3,000万人	「近代西欧文明」 産業革命、科学技術	2000年～	<b>トリエンナーレの時代？</b>

出典) 吉本光宏、今こそ芸術文化のインフラストラクチャー構築を、ニッセイ基礎研究所 調査月報 1990年4月号 (一部改訂)

これまで日本の人口推移には大きく4つの波があったと言われている。それぞれの人口増加期にはそれを支える文明が登場し、限られた国土で養える人口を増加させてきた。いずれも一定の期間を経て人口の停滞もしくは減少期へと移行する。過去の日本の歴史を振り返ると、これまでに3回の人口停滞期があるが、それらはいずれも日本独自の文化や芸術が誕生した時期と重なる(図表5)。

その歴史が繰り返されるとすれば、日本は有史以来4回目の文化の時代を迎えたことになる。そうした大きな時代の流れの中で、全国各地のトリエンナーレが開催されている。

トリエンナーレの相次ぐ創設によって、アーティストの活躍の場は大きく広がった。とりわけ、各地の芸術祭や近年活発になったアートプロジェクトをノマドのように渡り歩きながら活躍する日本の若いアーティストの数は2000年以降格段に増えている。

彼らに限らず、国際芸術祭に世界各国から招へいされたアーティストたちは、芸術監督の要請に応じ、地域の歴史、文化と向き合いながら、作品の設置場所を探し、自らの新しい表現を模索して作品を制作、設置する。そこは国内外の芸術の今が集約される場であり、それを一望できる機会を私たちに提供してくれる。

しかし、本稿で紹介したように、日本各地で開催されているトリエンナーレは、単に芸術作品を展示、紹介する文化イベントの域を超えている。多くのトリエンナーレが地域の活性化を掲げており、確かに様々な効果が生み出されていることも事実だ。だが、そうしたわかりやすい側面だけで、現在のトリエンナーレの役割を捉えるのは適切ではないだろう。それ以上に、既存の価値観を揺さぶり、現代社会に問題提起をする存在としてのトリエンナーレ。そこにこそ、時代の大きな転換点を迎えた日本におけるトリエンナーレの意味を見いだすべきではないだろうか。

不便を承知で瀬戸内の離島のアート作品に100万人以上が訪れるのは、私たち自身も、今の時代に大きな疑問を抱き、新たな価値観を模索しているからだと思えるのである。

現在、日本各地で実施されているトリエンナーレのうち、10年後、20年後も継続しているものは果たして何件あるだろうか。その間にさらに新しく始まるものもあるかもしれない。そうしたトリエンナーレの時代は日本の将来に何を残すのか。主催者や芸術監督、そしてアーティストたちの力量が問われるのはこれからだ。